

印西歴史愛好会 公開講座

2022.6.12 於：小林コミュニティプラザ

藤 由美

「旧本埜村の石仏・石碑探訪」



物木のムラ入口の庚申塔群



中根の福聚院の寛文9年（1669）銘
如意輪観音像十九夜塔

石碑・石仏・石造文化財

- * 石碑＝石に業績や事跡を記念する文字を刻んで建てたもの。
例：日本三古碑や歌碑・句碑・近代の記念碑
- * 石仏＝石に彫られた仏像（梵字の種字や文字銘もあり）
- * 石塔＝石でできた仏塔：層塔・宝塔・五輪塔・宝篋印塔などの供養塔
⇒板碑・石仏⇒墓塔
- * 石造文化財＝石碑・石仏・石塔のほか、石燈籠・石鳥居・石碑・狛犬など

旧本埜村(印西市本埜地区)

- * 「本埜村」は大正2年(1913)に本郷村と埜原(やわら)村が合併成立し、平成22年(2010)3月印西市に編入合併した旧村です。
- * 本郷村は、中世から続く台地上の7か村で構成
笠神村、中根村、滝村、龍腹寺村、物木村、荒野村、角田村
- * 埜原村は、近世以後の新田開発による印旛沼畔の14の新田で構成
小林新田、将監新田、松本新田、中田切新田、安食ト杭新田、酒直ト杭新田、下井新田、長門屋新田、甚兵衛新田、佐野屋新田、押付新田、下曾根新田、行徳新田、中根新田
- * この本埜地区には、水神社・鳥見神社・八幡神社・稲荷神社など神社25社、真言宗豊山派の密蔵院、曹洞宗の龍湖寺、天台宗の龍腹寺・東漸寺・福聚院・南陽院・栄福寺・安楽院・瀧水寺の7か寺と、今は地区集会所などになっている庵跡、城砦跡や墓地などがあり、旧村の景観とともに、中世から現代まで多くの石仏や石碑が残されています。



(1) 庚申塔とは

- * 庚申待は、60日に1回庚申の夜に、三尸が眠った人間の体から抜け出し天帝にその人の罪過を告げに行かないよう徹夜するという、中国の道教に由来した信仰でした。
- * 室町時代ごろからは、各地で「**庚申講**」が行われ、**庚申供養塔**も建てられました。
- * 中世は「板碑」、江戸時代初期からは、願文を刻んだ板碑型石塔や、**三猿**とともに如来や菩薩像を浮彫した石仏が作られるようになり、寛文期からは、**青面金剛を本尊**とする庚申塔も現れ始めます。
- * 江戸中期には、青面金剛像に、日月や三猿(見ざる・聞かざる・言わざる)、邪鬼や鶏を伴う手の込んだ彫りの石塔が流行、またその憤怒の形相に悪魔退治の願いを込め、村の入り口などに建てられるようになりました。

本埜地区最古の庚申塔



寛文2年（1662）銘
中根山林内



庚申塔（中根 山林内 寛文2年）

銘文

拓本

道沢

二良左工門 四良兵へ 彦右工門 口兵へ
孫右工門 次左工門 与五左工門 口良兵へ

（月）南无青面金對心願皆令満足

中根内

（廿）奉供養庚申待三年一座成就所

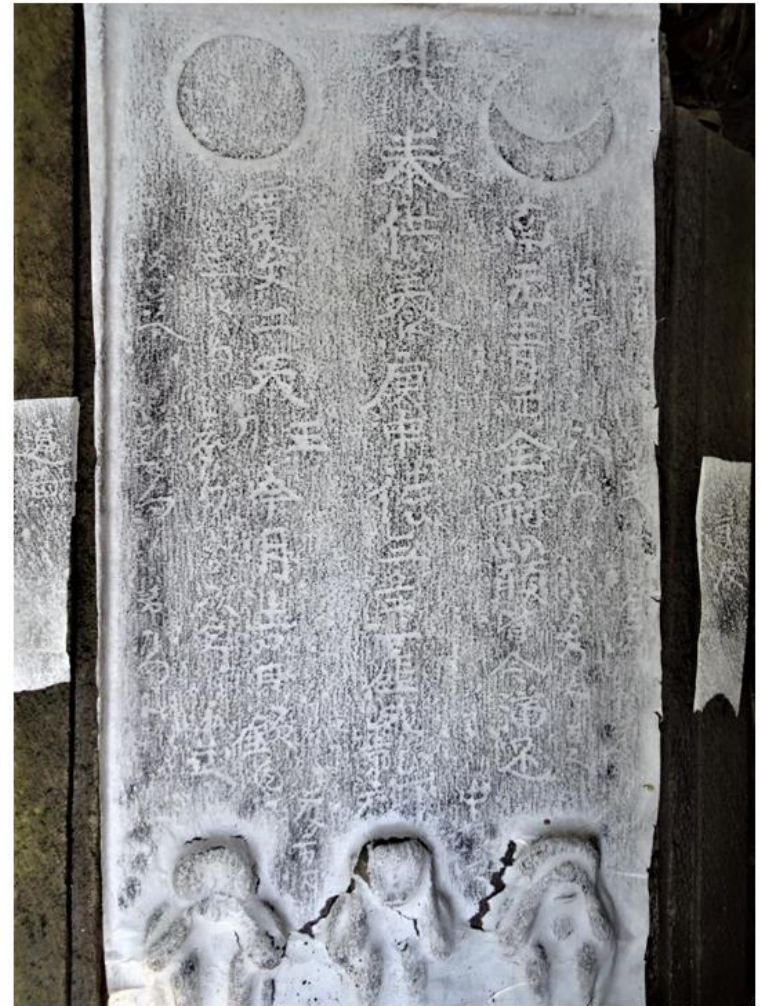
（三猿）

藤方内

（日）寛文二天 壬今月吉日欽白

五良左工門 口左工門 次右工門 二良兵へ
源兵へ 新右工門 市左工門

道円



関東の江戸時代初期の三猿付き庚申塔



承応 2 年 (1653)
富津市竹岡 松翁院



承応 2 年 (1653)
藤沢市伊勢山公園



万治 2 年 (1659)
我孫子市青山八幡神社

近隣市の初期の庚申塔



佐倉市先崎 慶安3年(1650) 地蔵菩薩像
「奉造立庚申人数廿五人／先崎村／
本願友野河内／慶安三天／庚寅／二月廿四日」

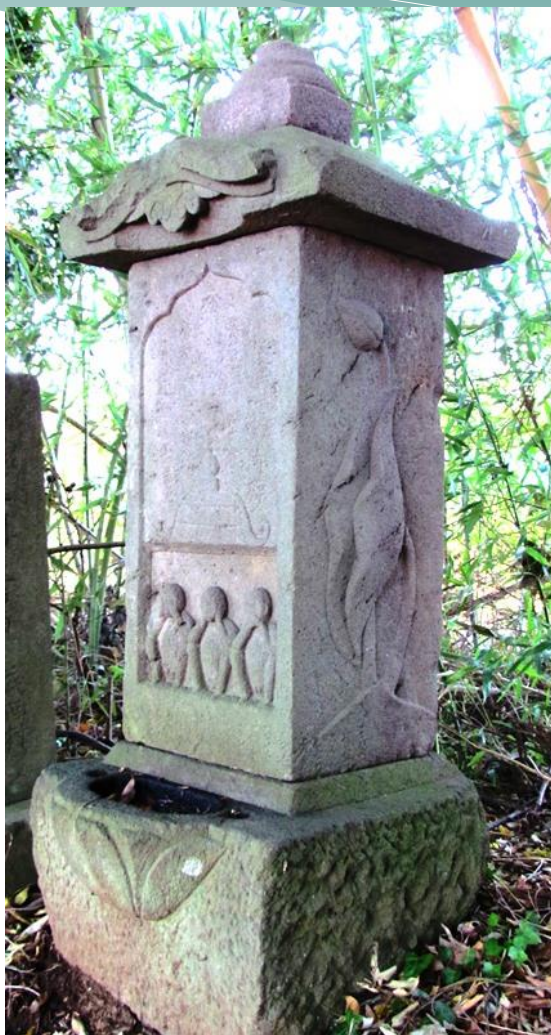


八千代市高本八幡神社 万治3年(1660)
「万治三天庚子十月吉日 為庚申待現當二世
悉地成就処 講人数十八一結諸衆 敬白」

印西市内の初期の庚申塔



寛文元年（1661） 印西市最古
竹袋観音堂
聖観音像庚申塔 蓮台に三猿像



寛文10年（1670）
武西百庚申の隣



寛文11年（1671）
印西市砂田庚申堂内
二手青面金剛像と三猿

庚申塚の風景



物木317 庚申塚

貞享3年(1686)の青面金剛像庚申塔から嘉永3年(1850)文字庚申塔まで8基の庚申塔が並んでいる。

本埜地区の初期の三猿像庚申塔



延宝3年(1675)
押付4水神社



貞享4年(1687)
酒直卜杭水神社



元禄10年(1697)
将監・密蔵院

初期の青面金剛像のさまざまな姿



貞享3年(1686)
物木317 庚申塚



貞享4年(1687)
中田切38白山神社

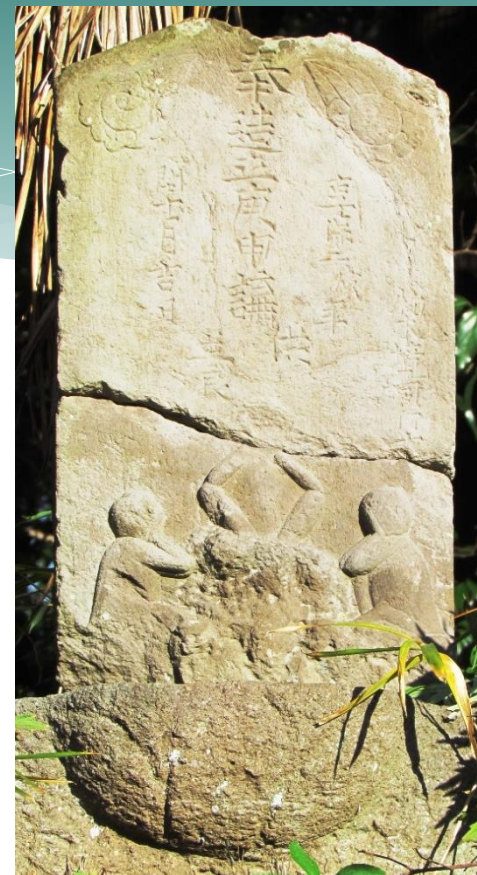


正徳2年(1712)
中田切白山神社

画一的な特徴の青面金剛と三猿像



享保3年(1718)
下曽根市杵島神社



享保3年(1718)
物木庚申塚

印西市域・白井市・船橋市の東部・我孫子市・柏市・栄町で
享保から宝暦年間(1718～1763)に特徴的な庚申塔

- ・主尊の目がアーモンド形
- ・右手に鈴状または人の頭部らしき袋状のものを持つ
- ・宝輪を持つ手が直角で水平
- ・迫力がない邪鬼がうずくまる姿
- ・中央が正面、両端が横向きの三猿像の構図

画一的な特徴の青面金剛と三猿像



寛延2年(1749)
笠神古墳群



宝暦2年(1752)
佐野屋八幡神社



宝暦4年(1754)
物木317庚申塚



宝暦6年(1756)
向公会堂

笠神社の百庚申



上: 左側(北側)の列の奥には慶應二年塔が並ぶ



像塔18基と文字塔(「庚申塔」)82基

慶應三年塔が並ぶ右側(南側)の列

蘓波鷹神社の百庚申



明治16年(1883)～昭和10年(1935)銘の像塔6基と文字塔54基の計60基

道標付き庚申塔



庚申塔・道標 文化10年(1813)
中根の本埜第一小裏門入口
「北 笠神あじき／東 よし田 成田 江／
西 舟尾 江戸 江／たき村みち江」銘



庚申塔・道標 文政9年(1826)
滝・稲荷神社
「南 たき さくら そうふけ ふなお 道／
北 ひらおか こはやし ものおき かさかみ 道」

道標付き庚申塔

庚申塔・道標 万延元年(1860)
竜腹寺路傍三差路

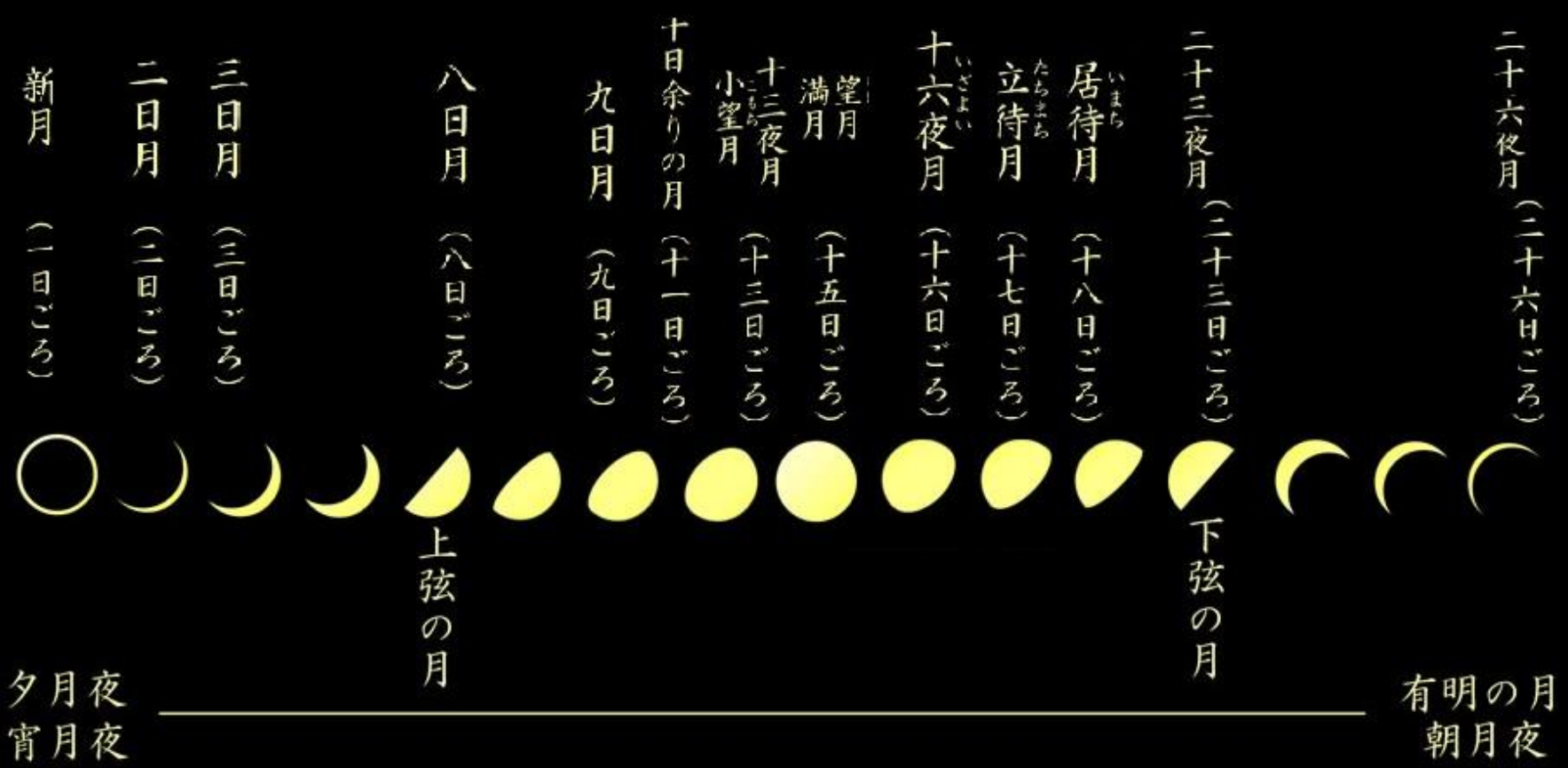


裏面	左面	正面	右面
万延元年庚申九月吉日	左ハ かさがみ 小ばやし新田 道	庚申塔	右ハ よしたか川岸よりなりた せとかしよりさくら 道

(2) 月待塔と女人講の石塔

- * 月待(つきまち)とは、月の満ち欠けによる月齢の十五夜・十六夜・十七夜・十九夜・二十三夜・二十六夜など、毎月または特定月の特定日(アタリ日)に講中が集り、本尊を祀り飲食しながらの月の出を待ち、礼拝する行事です。
- * 月待は、日が暮れてから月の出る**十五夜**を過ぎた夜に集中します。満月(十五夜)は18時頃、下弦の月の二十三夜は真夜中の24時頃、二十六夜は明け方の陽が昇る前に出てきます。
- * **二十三夜待**は16世紀ごろから公家社会で行われ、庶民層にも普及して全国的に広まり、月待というと「二十三夜待」を指していました。
- * 十九夜講中によって造立されたのが、**十九夜塔**です。十九夜講のほとんどは女人講で、十九夜塔は山形・福島と関東一円、長野、関西では京都・奈良など各地に分布しています。中でも千葉県では北総一帯に特徴的に分布し、如意輪観音または子安観音の刻像が多くみられます。

月の満ち欠けと月待



二十三夜の月待信仰

二十三夜の月待信仰は、「月神の月天子は勢至菩薩の化身」と説く隋代の『法華文句』に由来し、月神の本地仏・勢至菩薩と二十三日が結びつき、月を拝み念仏する風習が広まりました。



荒野南の内の二十三夜塔群

文化年間～昭和13年 江戸期の二十三夜塔は道標付が多い。明治8年からは「女人講中」銘

本埜地区の二十三夜塔



寛文八年(1668)
本埜地区最古の二十三夜塔
物木の諏訪神社念仏堂跡



寛文十年(1670)銘の勢至菩薩像塔
中根の釈迦堂跡墓地



天保10年(1839) 二十三夜塔
中田切三区コミュニティセンター

道標付き二十三夜塔



文化10年(1813)二十三夜塔・道標
荒野南の内の二十三夜塔群

左
江戸
道
つくりや



右
きおろし
道
あびこ

文政10(1828)二十三夜塔・道標
荒野南の内の二十三夜塔群

十九夜塔とは

旧暦19日の夜、女性が寺や当番の家に集まって、講を開き、如意輪観音の前で経文、真言や和讃を唱える行事を「**十九夜講**」と呼び、関東北東部で盛んに行われていました。

十九夜講が、祈願の信仰対象あるいは成就のあかしとして建立する石塔が「**十九夜塔**」で、主に、右手を右ほほに当て首をかしげ、右ひざを立てて座る姿の**如意輪観音像が主尊**として彫刻されています。

「十九夜念仏供養 二世安楽」などの銘文と、如意輪観音像を刻んだ典型的な十九夜塔が盛んに建てられるようになるのは、千葉県内では、寛文5年(1665)印西市の小倉青年館の石塔からです。

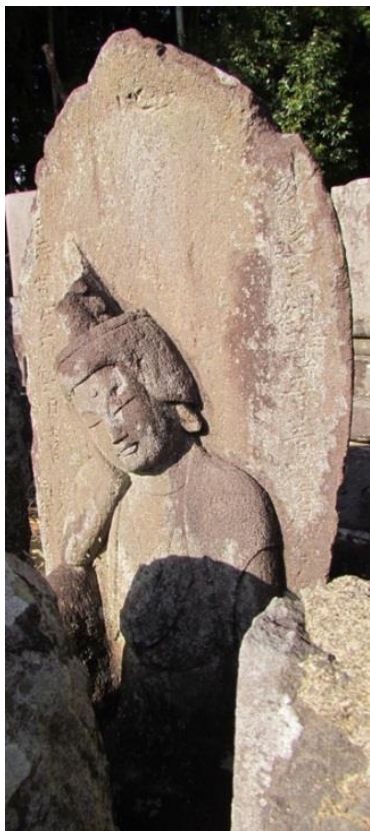
本埜地区では、寛文九(1669)年の中根の福聚院の六臂如意輪像塔が初出です。

同じく寛文九年銘の笠神青年館(原堂)墓地の六臂如意輪観音像塔も、「十九夜」の銘はないが、「印西之庄笠神之郷同道四十三人」とあり、十九夜塔と推定されます。



寛文5年(1665)
小倉青年館

印西市内の初期の十九夜塔の如意輪観音の姿



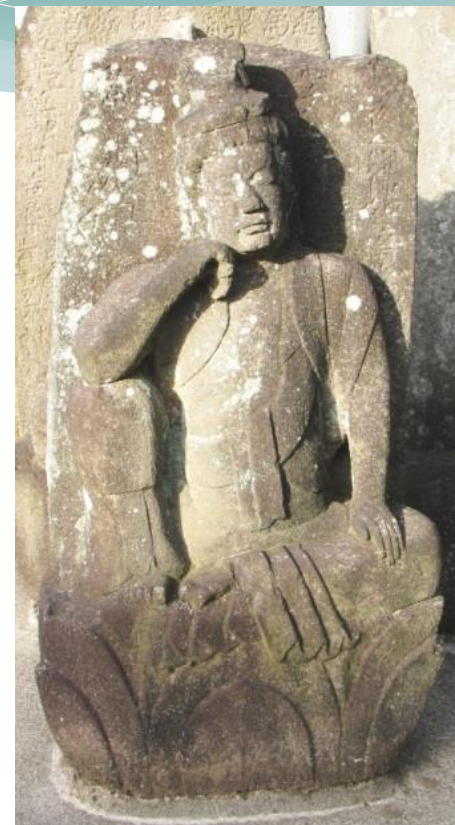
寛文6年(1666)
山田円蔵寺



寛文8年(1668)
大森古新田青年館



寛文8年(1668)
和泉青年館



寛文8年(1668)
別所地藏寺

本埜地区の最古の十九夜塔



寛文9年(1669)十九夜塔 中根福聚院



寛文9年(1669)如意輪観音像塔 笠神青年館(原堂)
「印西之庄笠神之郷同道四十三人」の銘

本埜地区の江戸前期の十九夜塔



寛文期から正徳期までの江戸前期の十九夜塔は推定も入れて22基、特に延宝期の塔は9基を数えるなど、本埜地区は、北総でも早い時期から造立が盛んな傾向があります。

その理由として、十九夜塔発祥の利根川中流域にあり、また龍湖寺や瀧水寺など女人信仰の篤い寺や女人講が盛んな地区が多いことがあげられます。

寛文10年(1670)十九夜塔
押付・薬師堂

本埜地区の江戸前期の十九夜塔



延宝7年(1679)
安食卜杭青年館

元禄12年(1699)

正徳2年(1712)

子安像塔の十九夜塔から子安塔へ

宝暦五年(1755)行徳稲荷神社の「十九夜念仏講」造立の十九夜塔の主尊は、思惟相が如意輪観音の**赤子を抱く子安像**となり、その後は、子安像塔へと次第に置き換わっていきます。

そして、江戸中期までの十九夜塔に替わって、北総の女人信仰の石塔は江戸時代後期から徐々に、そして近代以降現代まで、そのほとんどが「子安観音」や「子安明神」の主尊を子安像として浮き彫りした**子安塔**となります。

江戸時代のはじめ、二世安楽を念誦する念仏講から 女人成仏を如意輪観音に祈願する**十九夜講**へ発展した女人講は、さらに、江戸後期からムラのお嫁さんが 安産子育てのご利益と親睦を目的に集う**子安講**へ変わっていきます。

宝暦5年(1755)行徳 稲荷神社



特徴ある本埜地区の子安塔



安永5年(1776) 滝・瀧水寺



安永8年(1779)下曾根市杵島神社

主尊が正面を向き肩と胸
元に二人の小児を配する
特徴を持つ子安像塔

特徴ある本埜地区の子安塔



寛政8 年(1796)滝 瀧水寺



文政13年(1830)行徳稲荷神社



天保2年(1831)將監密蔵院

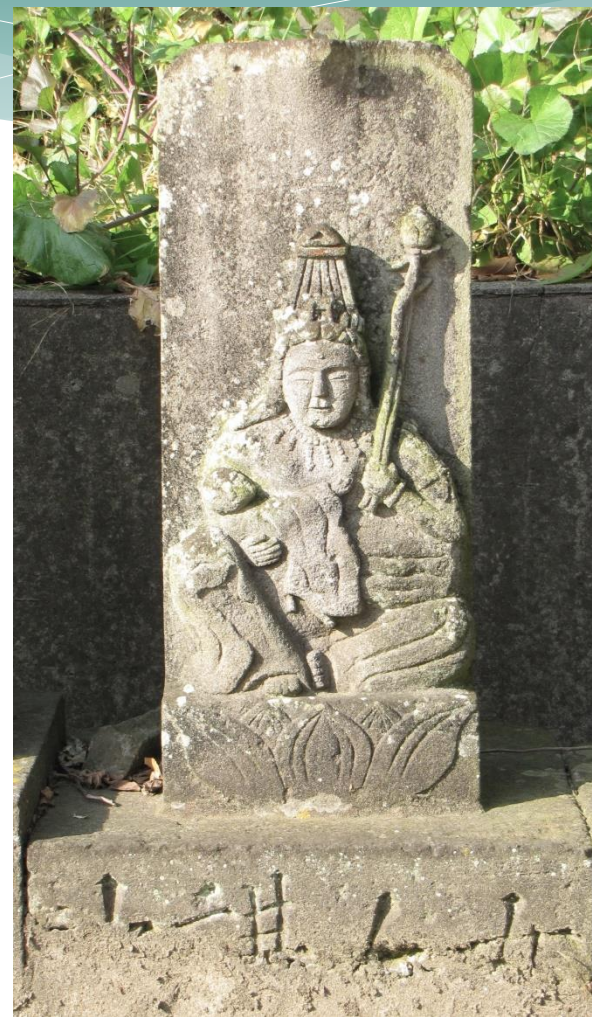
本埜地区の子安塔-江戸後期から近代へ



元治元年(1864)中 八幡神社



明治23年(1890)下曾根市杵島神社



大正11年(1922)小林水神社

本埜地区の子安塔-近代から現代へ



昭和16年(1941)酒直卜杭水神社



昭和61年(1986)角田栄福寺



昭和62年(1987)安食卜杭 青年館

十五夜塔&十七夜塔



十五夜塔 天明八年(1788)
物木諏訪神社念仏堂跡銘
「奉需十五夜當村講中」



十七夜塔 元文5年(1740)
行徳 稲荷神社・大日堂
蓮台を持つ観音菩薩立像
銘「奉供養十七夜講中廿二人」

二十夜塔



寛文9年(1669)二十夜塔
銘「二十日夜念仏供養
奉十一面観音…」
(十一面観音立像)
物木諏訪神社念仏堂跡



明和元年(1764)二十夜塔
「廿日構供養塔」銘
(如意輪観音像)
物木諏訪神社念仏堂跡

二十六夜塔



安永8年(1779) 二十六夜塔・道標
荒野の南之内二十三夜塔群
銘「奉待廿六夜講中／南ハいん〔 〕
／西ハ(き)おろ(し)／女人講中」



安永9年(1780) 二十六夜塔
地蔵菩薩立像 中根釈迦堂跡墓地
銘「奉建立廿六夜待供養」

(3) 仏像供養塔

- * 如来像塔＝大日如来・釈迦如来など
 - * 菩薩像塔＝地蔵菩薩・如意輪観音菩薩・勢至観音菩薩・馬頭観音菩薩など
 - * 明王像塔＝不動明王など
 - * 祖師像塔＝弘法大師像など
-
- * 本埜地区では、大日如来像塔は念仏講の主尊として5基、地蔵菩薩像塔は74基、うち半数は六地蔵塔です。
馬頭観音塔は26基、不動明王像塔が5基あります。

大日如来像塔

大日如来は「大いなる日輪」という意味の毘盧舎那如来がさらに進化した仏で、密教では宇宙を指し、すべての命あるものは大日如来から生まれたとされます。

大日如来には悟りを得るための智慧を象徴する金剛界と、無限の慈悲を象徴する胎藏界いう二つの捉え方があり、二つ揃って密教の世界観が構成されています。

金剛界大日如来は智拳印、胎藏界大日如来は定印を結ぶます。



明和5年(1769)

念仏塔(大日如来像)

中根・戸崎観音堂

「奉建立齊念佛供養善男女／同行七十九人」銘

「齊念佛」の「齊(とき)」とは、法会の際の僧侶の食事をさし、仏と飲食を共にすることに特別の意味をもつ念仏講が行われていたと推察されます。



安永8年(1779)

念仏塔(大日如来像)

押付・薬師堂

「念仏供養押付講中十五人」銘

地蔵菩薩像塔

地蔵菩薩は、釈迦の入滅後、弥勒菩薩が現れるまでの無仏時代の衆生を救済することを釈迦から委ねられたとされ、サンスクリット語で「クシティガルバ」、即ち「胎内」大地や意味し「地蔵」と訳されたといわれます。

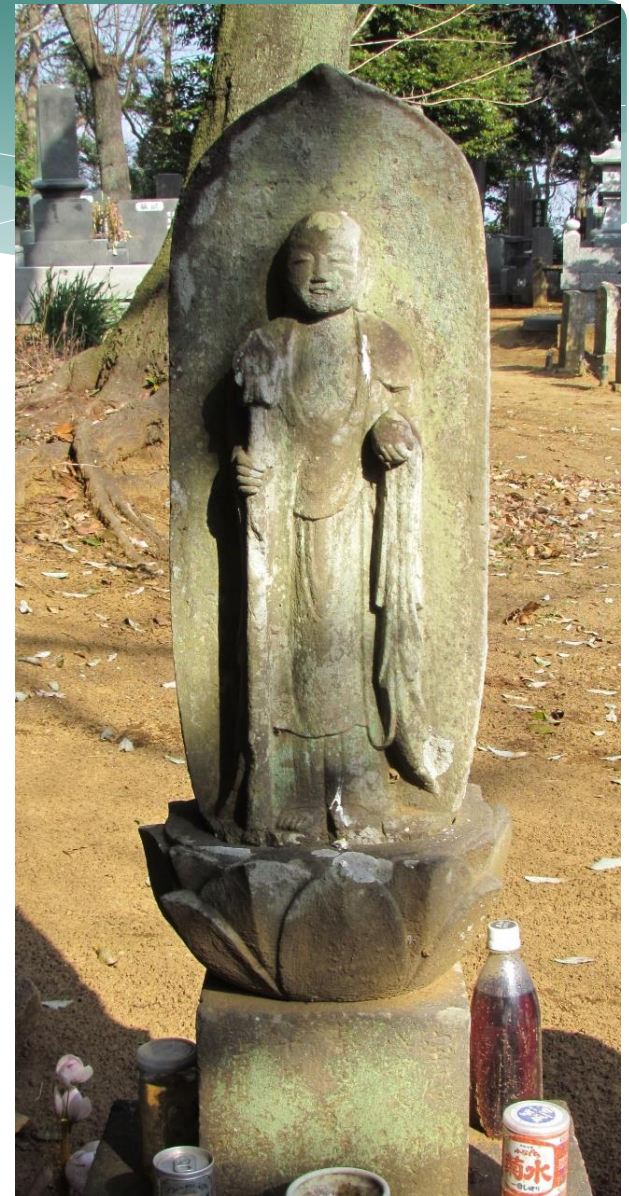
大地が全ての命を育む力を蔵するように、苦悩の人々を、その無限の大慈悲の心で包み込むことから中世から石仏として最も親しまれました。

また、中国の十王思想で「地蔵王菩薩」として閻魔大王と同一との信仰により、死者の救済のため霊界との境に多く建てられました。

一般には剃髪した僧侶の姿で袈裟を身にまといます。

左手に如意宝珠、右手に錫杖を持つか与願印をとる像が多くみられます。

光背型のほか、台石上高く祀られた丸彫像も多いが、地震などで損傷し分離しやすく、完形で残っている丸彫塔は貴重です。



宝暦8年(1758) 地蔵菩薩像塔(女人講)
中根・戸崎観音堂

地蔵菩薩像塔



明和4年(1767) 地蔵菩薩像塔 物木・龍湖寺



明和5年(1768) 三界萬靈塔 将監・の密蔵院

地蔵像廻国塔



享保12年(1727)地蔵像廻国塔
笠神・南陽院

「日本回國」の銘があるこの
廻国塔とは、日本全国六十六
部を廻国巡礼した記念の供養
塔です。



享保18年(1733)地蔵像廻国塔
笠神・向公会堂

六地藏塔

地藏菩薩の像を6体並べて祀った六地藏像は、道輪廻の思想に基づき、六道のそれぞれを6種の地藏が救うとする説から生まれたもので、寺院や墓地入り口に多くみられます。



正徳2年(1712) 六地藏塔
物木・龍湖寺



明和3年(1766)～寛政3(1791)
六地藏塔(丸彫像)
角田・栄福寺

六地藏塔



宝永4年(1707) 六地藏灯籠
龍腹寺



嘉永三年(1850)
中・八幡神社の六地藏像六面石幢



大正12年(1923) 六地藏石幢
荒野コミュニティセンター

花見堂地藏像塔

花見堂地蔵とは、合掌型地蔵像の光背に「花見堂」などの銘、造立日が宝永～文化年間で三月三日や三月吉日が多く、「童男童女」「子供中」などの子供に関わる銘がある小型の地蔵塔です。

印旛沼北西部に26基と関連が検討中の10基、それに先行するさいたま市内など10基が報告されています。

おそらく旧暦の3月子供主体に地蔵様を祀り飲食した行事であったろうと推定されますが、その実態は不明です。



享保15年(1730)の花見堂地蔵
印旛地区岩戸の山林内宗像神社
銘「花見堂／子共造立／古谷」



享保18年(1733)の花見堂地蔵
和泉屋氷川神社 銘「童男童女華見堂」

花見堂地藏像



宝暦10年3月3日(1760)
銘は「奉供養花見堂地藏尊」



中根903-2丁字路傍の花見堂地藏



寛延2年3月3日(1749)
銘「花見堂地藏尊／同行十人」

馬頭観音塔

馬頭観音は変化六観音のひとつで、その像は憤怒の相が多く、衆生の無智・煩惱を排除し諸悪を毀壊する菩薩として信仰されてきました。

民間信仰ではその「馬頭」という名から馬の守護仏、さらにすべての畜生類を救うとされて、その石仏の多くは路傍やソウマンド（馬・動物の墓）に供えられました。

本埜地区では、安永7年からの刻像塔が8基、文政10年以降の「馬頭観世音」銘の文字塔が18基、計26基があります。



竜腹寺464路傍

馬頭観音塔



安永7年(1778)
瀧390地先の塚



天明三年(1783)
本埜小林墓地



享和三年(1803)瀧
390地先の塚

馬頭觀音塔



文化3年(1806) 竜腹寺・道六神前の辻



慶應3年(1867) 将監・密蔵院

(4) 富士講関連石造物

- * 古来、富士山は、神霊が宿る高山として、また同時に恐るべき噴火山として、崇拝畏怖された特別な信仰対象でした。中世に噴火が鎮まると、修験者による修業としての登拝が可能となり、近世になると開祖の長谷川角行や食行身禄らの行者の荒行とその験力、教えが一般の人々に広められ、後継者によって関東各地に富士講の「代参講」が組織されて、爆発的に富士信仰が流行しました。
- * 代参講は、数年間を単位に、地域の先達・講元・世話人の役職と講員数十名によって組織される。講員は、講を代表して輪番で1回は登拝でき、その代参費用は月並講などで集めて積み立てられた講費が充てられます。
- * 各地の代参講は、角行の後継者の法脈から約百数十の流派があり、房総では山水講、山包講や丸不二講などが盛んで、それぞれの「笠印」を持ちます。先達は、上吉田の御師から許された「行名」を名のり、三十三度以上の登拝を成就した先達は「大先達」と呼ばれ、尊敬されました。また三役と講員で毎月一回拝みを行う「月並講」も開かれていました。

富士信仰の石祠



延享二年(1745)滝白山神社
「富士浅間宮／講中」銘の石祠



明治十二年(1879)竜腹寺浅間神社
「仙元神社」銘石祠

笠神の浅間神社



- 本埜支所の西約500m、台地先端の山上にある。
- 塚の上に明治14年（1881）の石祠、祭神木花開邪姫を祀る
- 明治20年～昭和23年までの富士講碑6基
総高1.5～2.1m、人名銘78～160人、山包講紋あり
- 「御室仙元大士」碑（仙元大菩薩＝木花咲耶姫）
- 「磐長姫命」碑（木花咲耶姫の姉・五合目小御嶽社祭神）
- 「食行身祿尊師」碑（富士信仰の中興の祖）



笠神浅間神社の本殿石祠

台石 左面		左面	正面	右面	写真
岩井治○ 石川徳左工門 鈴木重右工門 岩井平兵工 同 与五郎 同 与三郎 川森徳右工門 同 由右工門 岡田○右工門 岩井○○門 同 ○左工門 岡田 文蔵 岩井作右工門 同 長右工門 岡田三右工門		先達 長行真山 脇同 脇行金山 脇同 春山大行		明治十四年十一月建之	
岩井治右工門 浅尾半十郎 浅野与左工門 篠塚源左工門 長谷川○○ 川森 清八 岩井治○工門 全 久次 岡田長左工門 五十嵐甚五兵工 岩井源右工門 ○○三良左工門 全 庄左工門 石川平左工門 岩井 善蔵					
台石 裏面		台石 右面			
鈴木 勘兵工 清宮○○工門 富山 林蔵 岩井所左工門 出山六左工門 吉川蔵○工門 岡田安○工門 富山 佐七 同 茂市 同 上右工門 川上三良右工門 同 甚左工門 小川○右工門 岩井○左工門 富山 佐七 岡田安○工門 吉川蔵○工門 出山六左工門 岩井所左工門 富山 林蔵 清宮○○工門 鈴木 勘兵工		稲葉七良次 岩井六兵工 富山○兵工 出山四郎左工門 篠塚新右工門 同 又左工門 岩井五左工門 富山甚左工門 岩井定右工門 押田忠右工門 岡田 文治 岩井奎左工門 清宮伊右工門 鈴木重左工門 岩井庄右工門			
押田○○ 同 ○兵工 五十嵐治兵工 岩井○○ 同 ○兵工 岩井○次○ 押田○○門 ○○○○郎 岩井○兵工 同 ○兵工 岩井○兵工 五十嵐治兵工 岩井○○ 同 ○兵工 押田○○		岩井惣右工門 篠塚庄兵工 岩井 新八 篠塚又兵工 岩井茂右工門 同 八良兵工 林田○右工門 出山○右工門 篠塚○兵工 石○○左工門 ○○○○平 ○○○○工門 ○○○○門 ○○○○兵工 ○○○○工門 石工小林新田 梶○○吉五良			

笠神浅間神社の石塔



「磐長姫命」碑
明治19年(1886)



「食行身禄尊師」碑
昭和6年(1931)



「御室仙元大士」碑
昭和9年(1934)

和泉屋氷川神社の石祠(大正10年)

左面	正面	右面	写真
大願成就 訓導 木行平月 鈴木平助建之		大正十年六月朔日 おこたらず誠の道を辿りつゝ 神のみしるしとはにあおがん	
(台石左面)	(台石正面)	(台石右面)	
権少講義 者 信 一等講長 真行秋月 服部勝行 岩井万藏 清水源七 岩城調行 若尾政太郎 石塚秀太郎 全 泰助 屋敷恒太郎 鈴木利惣治 屋敷与行 小川重行	(「山包」の印)		

(5) 印西大師新四国霊場巡礼に関わる石造物

本埜地区に特徴的に多いのは、弘法大師石像、弘法大師供養塔(「南無大師遍照金剛供養塔」)など、印西大師八十八か所新四国巡礼に関連する石造物です。

- * 印西大師新四国霊場は、昭和十年(1935)に建てられた笠神の南陽院の勧請記念碑によれば、南陽院の臨唱法印が享保6年(1721)に四国霊場から勧請して創設、その後天保元年(1830 碑文では「文政十三年」)南陽院の孝祐法印が再興し、88札所に弘法大師石像を配したといわれます。
その範囲は、印西市全域と一部白井市域におよび、札所は88か所のほか番外70か所ほどあり、おおよそ160か所を巡行しています。
- * 創設当時は、弘法大師の霊力にあずかり、水害や飢饉の苦しみから逃れ、同時に、死者の供養、自身の健康長寿を祈念した巡礼で、利根川下流域では、最も古い四国霊場写しでした。
- * 印西大師の特徴は、先達寺の南陽院(笠神)、来福寺(平賀)、廣福寺(師戸)の3か寺が交代で出発と結願寺を受け持つことで、現在は、毎年4月1日から6日間行われています。
- * 本埜地区の札所の数は重複も入れると、28か所で、そのうち15か所が番外です。
- * 各札所には複数の弘法大師石像が、また巡礼の拠点となった地域には、「小廻組合」の弘法大師供養塔(「南無大師遍照金剛供養塔」)、また3基の霊場標石が2か所に建立されています。
- * なお、将監の密蔵院と安食ト杭青年館(覚了庵)の札所は、河内郡・北相馬郡・下埴生郡・印旛郡の旧下総国四郡にまたがる「四郡大師」(別称:布川組八十八ヶ所)の札所でもあります。

「印西大師新四国霊場巡礼」関連の石造物



明治19年(1886)
弘法大師像 佐野屋墓地



明治35年(1902)
弘法大師供養塔
中根・東漸寺



昭和10年(1935)
勧請記念碑(新四国霊場)
笠神・南陽院

「印西大師新四国霊場巡礼」関連の石造物



明治十三年(1880)
弘法大師供養塔
行徳稲荷神社



明治二十八年(1895)
弘法大師供養塔
安食ト杭青年館

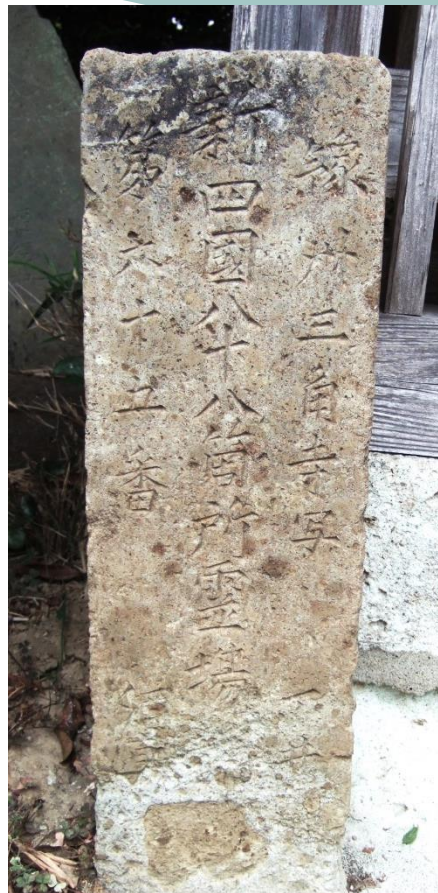


大正十一年(1922)
弘法大師供養塔
塔荒野コミュニティセンター

「印西大師新四国霊場巡礼」関連の石造物



霊場標石
「新四国八十八箇所／
土佐國定山奥院寫」
天保2年(1831)酒直卜杭 水神社



霊場標石
「新四国八十八箇所霊場／
第六十五番／豫洲三角寺写」
明治5年(1872)酒直卜杭 水神社



霊場標石
「新四国八十八ヶ所霊場
／第三十二番／土州高福寺写」
明治5年(1872)
中田切三区コミュニティセンター